

# 授かりもの

現代はまれに見る少子化社会と言われています。今、年金問題が、日本の将来の問題として取り上げられていますが、これもこの少子化の時代とは無関係ではないのでしょうか。

結婚しない、子供を作らない、計算ではあと三年ほどで人口減少に推移し、五百年もすれば日本人は一人もいなくなるそうです。

昭和五十三年にイギリスで世界初の体外受精児、試験管ベービーが誕生し、同じ年にアメリカで白血病で苦しむ七歳の子供の生命維持装置の酸素ボンベのコックを母親が閉じてしまい生命を絶つたニュースが流れました。このころからでしょうか、いのちが人為的に語られるようになつてきたのは・・・。人間のいのちか試験管にはじまりコックで終わるという現実をつけられたのです。「自分の子供が欲しい」という願いは今も昔も変わりはありません。しかし昔のいのちは「授かりもの」であり今のいのちは「つくるもの」ということになつてきているようです。

生殖技術の進歩はすっかり人間を思い上がりさせ人智を超えた方向に突き進んでいるように思えてなりません。最近では受精卵の遺伝子診断までできるようになつたといいます。男女の産み分けから、優秀な遺伝子の子供をという思い、誰もが優秀だったら優秀とは言わないと思うのです。誰もが違うからこそ人間社会と言うのだと思います。誰もが同じ社会は気持ちが悪くはありませんか。又子供の欲しい願いは代理母という考え方まで生み出しました。

子供は「授かりもの」と思い、他人の子供さえも自分の子供として育てていた時代と、どんな手段を使つてでも自分の子供を手に入れようとする時代と人間としてどちらがやさしいのでしょうか。なにより子供を「授かりもの」と考えることは子供ばかりでなく「自分」も「他人」もすべてのいのちが「授かりもの」と見ていくるようになつてきます。それは自分のいのちは、自分を超えて他のいのちと、つながり、ひろがっている【縁起】という考えになつてきます。

それは自分のいのちであつても自分勝手には扱えるものではないということです。

臓器移植、尊厳死などという言葉が美しく語られていますが、そのなかで「自己決定」とか「本人の意志」ということがもてはやされています。しかし自分のいのちだからと言って、自分のいのちの扱いを自分で決定していいのなのでしょうか。「授かりもの」なら決してそのようなことは出来ないはずです。他とのつながりの中で私が「お預かりしているいのち」という実感が希薄になつてきている時代なのかもしません。「オレの勝手」ではオレのいのちばかりか他のいのちも見えてはこないでしよう。そればかりか他のいのちを損なうような事も平氣でしてしまふかもしません。確かに医学、科学の発達は人間に多くの恩恵をもたらしました。しかし失つたものというより、見えにくくしてしまつたものも多々あるようです。

仏教の縁起の考えはその見えにくくしてしまつたものを「見つめる、気づけ」と示します。それはいのちの根本はつながりあり、支え合つてているというのが仏教の基本原理そのものだからなのです。